ストレンナ 2025

希望に 錨(いかり) をおろし、ともに歩もう

参考）伊：**Ancorati alla speranza, pellegrini con i giovani**
西：**Anclados en la esperanza, peregrinos con los jóvenes**
英：**Anchored in hope, pilgrims with young people**
仏：**Ancrés dans l'espoir, les pèlerins avec les jeunes**
葡：**Ancorados na esperança, peregrinos com jovens**

兄弟の皆さん、姉妹の皆さん、ドン・ボスコのサレジオ家族の皆さん、

毎年 7 月にそうするように、新しい年のストレンナのテーマの簡単な紹介を送ります。そうすることで、9 月に新しい学年、司牧の年を迎えるために準備しなければならない一部の国々が、何らかの指針を得られます。

今回の紹介文は「四手連弾」（二人の人が同じ曲を一台のピアノで一緒に弾く）のように書かれています。この概要を書き出したのは総長と副総長です。後に（確実に 10 月、11 月以降になるでしょう）、ステファノ・マルトリオ神父様自身が、サレジオ修道会の長上、またドン・ボスコのサレジオ家族のアニメーターとして、ストレンナ解説を準備し、内容を展開するでしょう。ステファノ神父はそれをサレジアン・シスターズに、そして、全サレジオ家族に進呈します。

チームと共に、2025 年のストレンナについて考えていたとき、私たちはすぐに一つの点で一致しました。ストレンナのテーマは、2025 年の聖年という教会の大きな節目に合わせたものにするべきだということです。聖年を、教皇フランシスコは大勅書『希望は欺かない』で発表しました。そして教皇は、「この書簡を読む人々の心が、希望で満たされますように」[1]という副題で興味深い視点を示しています。

同時に、2025 年、ドン・ボスコによって最初の宣教団がアルゼンチンへ派遣されてから 150 周年を迎えることを忘れないようにしたいと思います。その意味でも 2025 年は特別な年となります。

これらのことから、2025 年のストレンナの中心に「希望」がなければならない、そして若者と共に歩む道がなければならないと、私たちは考えました。こうして、「希望に錨をおろし、若者と共に歩む巡礼者」という題になりました。

１．希望は、恐れを超えて前進させる

教皇は、聖年の大勅書に「使徒パウロは希望のしるしの名のもとに、ローマのキリスト者の共同体に励ましを与えます」[2]と書いています。聖年を思うということは、***希望の巡礼者***としてすべての人のことを思うことです。私たちは、世界のあらゆる場所で、数多くのそれぞれの教会で、おびただしい数の希望の巡礼者となるでしょう。私たちは若者と共に巡礼します。それは救いの「扉」であるイエス（ヨハネ 10・7,9 参照）との親しい、生き生きとした出会いに至る旅です。この方、イエスこそが「私たちの希望」（1 テモテ 1・1）であることを、私たちは共にあかしできるのです。

[1] 教皇フランシスコ, 希望は欺かない Spes Non Confundit, 2025 年の通常聖年公布の大勅書, 2024 年 5 月 9 日 ローマ.
[2] 同, 1

再び教皇の言葉に戻ります。「すべての人は希望を抱きます。明日は何が起こるか分からないとはいえ、希望はよいものへの願望と期待として、一人ひとりの心の中に宿っています。けれども将来が予測できないことから、相反する思いを抱くこともあります。信頼から恐れへ、平穏から落胆へ、確信から疑いへ―。私たちはしばしば、失望した人と出会います。自分に幸福をもたらしうるものなど何もないかのように、懐疑的に、悲観的に将来を見る人たちです」[3]　生きることの、私たちの生活の一部であるこの現実、若者たちの家庭と若者たち自身の生活のこの現実に向き合うとき、新たな年、そしてその中で訪れる聖年が、すべての人にとり、***希望を新たにするすばらしい機会***になると私たちは信じます。

若者たちと共に、私たちはその希望を見いだすでしょう － そして若者一人ひとりが、また彼らが共同体としてその希望を見いだせるよう、助けます。主のうちに錨をおろした真の希望は、困難を前にしてくじけることがありません。なぜなら真の希望は、「信仰の上に建てられ、愛によって養われている」[4]からです。こうして私たちは、人生の道を歩み続けることができます。どの道でもいいのではなく、ただ生き永らえるということでもなく、キリスト者として真実な生き方をするということです。聖アウグスチヌスは、このことを見事に表現しています。「私たちがいかなる身分、状況にあろうと、霊魂のこの三つの姿勢、すなわち、信じること、希望すること、愛することなしに、私たちは生きることができない。」[5]

２．私たちはキリスト者の希望に錨をおろし、この道を歩む

キリスト者の希望は、失望に終わることがなく、欺くこともありません。なぜなら、何ものも、誰も、神の愛から私たちを引き離すことはできないという確かさに、それは基づいているからです。使徒パウロはこの確かさについて述べています（ローマ 8・35, 37)。したがって、神のみ言葉は私たちに確かさを与えてくれます。闇のただ中にあって、私たちは光をとらえ、主ご自身から、主の復活から来る力を得るのです。

確かにそれは、生きる道、すべての人が、何よりも、すべてのキリスト者が歩む人生の道です。特別な時、特別な節目、大きな影響を与える機会によって支えられなければならない***道***です。それらの時や機会は、私たちを主との出会へ、真実な、満ち満ちた意味をもって生きることへと導く希望を、養い、力づけるために必要です。

巡礼に赴く―聖年を通じて、私たちは若者と共に、幾多のかたちで、幾多の場所でこのことを体験するでしょう―それは、居心地のいい場所を離れることを願う、あるいはそうすることを必要とする人々に共通する行動です。私たち一人ひとりが落ち着いた居心地のいい場所、もしかすると幻滅を覚えたり、やる気を失ったりさえしている場所を後にすること。巡礼に趣くことは、私たちに、多くの場面で***努力***を、***沈黙する***こと、***本質へ向かう***ことを選ぶよう求めるでしょう。

私たちは若者と共に、この開かれた姿勢に身を置かなければならないでしょう。それは私たちにとって大いに益となり、主がふさわしいと思われるその時、その場所で、私たち一人ひとりと出会えるようにしてくれるでしょう。それは常に、私たちの心の最も尊く、最も深いところ、私たちの霊、存在に触れる出会いとなります。私たちはその時、その出会いに開かれていなければなりません。主との出会い

[3] 同上
[4] 同上 3
[5] アウグスチヌス, *Discourses, 198 augm.*, 2.

においては、「***リスクを冒す***」ことを恐れてはいけません。主は決して失望させません、特に私たちが、主にしがみついているなら、***主に錨をおろしている***なら。

３．真の希望をもって夢見る多くの若者がいる

私たちサレジオ会員、そしてサレジオ家族のすべてのメンバーにとって、ドン・ボスコの夢について話すことなく、ドン・ボスコの生涯について、ドン・ボスコについて話すのは不可能です。ドン・ボスコは生涯を通じて、その夢を思いと心に留めていました。夢が実現した後も。

若者たちは、ドン・ボスコの夢から、またサレジオの場で自分たちが生き、体験していることからインスピレーションを汲み、自分たちの抱いている美しい望みが原動力となり、大いなることを成しとげさせてくれることを発見するでしょう、そして、あらゆる挑戦は、勇気と自信によって乗り越えられることを学ぶでしょう。若者たちは大きな夢をもっていますが、夢見るよう勇気づけられなければなりません！私たち教育者の役目は、真実な人生の道を、若者に同伴して歩むことです。

若者は、より良い明日を夢見る権利があります。若者の手には可能性があります。生まれ変わる、何度でもやり直す、学び、働く、豊かな人間性と***希望***に満ちた未来を築く可能性です。

私たちが人生を分かち合う若者たち、サレジオ会の家々、全サレジオ家族の家々に集う若者たち、夢を抱く若者たちは（その夢の中には、私たちと共有するものもあります）[6]、明日を造り上げる職人、若い手で世界を形づくる者たちです。若者たちは、前進し、より良いものになりたいと望む人類の顔です。戦争、貧困、苦悩によって傷ついた人類、しかし、愛徳、愛の顔をもつ人類です。再び立ち上がり、希望をもつことのできる人類、地面から起き上がり、もういちど歩きはじめることのできる人類。ほほえむこと、愛することを決して絶やすことなく、温かく迎え、与えることのできる人類です。

すべての人が内に抱くこれらの物語や秘められた望みを通して、私たちは皆、どのように限界を乗り越えることができるか、大きな問題にどのように立ち向かえるか、そして、たとえ最も困難な状況にあっても、くじけてしまうのではなく、あらゆる挑戦に立ち向かうため、個人的な資質と、さまざまな社会環境の中にある力をどのように見いだせるかを、発見できるでしょう。すべての夢が同じということはありませんが、一つ確かなことがあります。私たちは皆、夢を抱いているということです！

若者たちが抱く幾百もの夢の中から、いくつかを例として紹介しましょう。若者たちのように、私たちは来る日も来る日も、日々の巡礼を続けなければなりません。***希望*** のうちに生きるよう若者を導く道をたどって。なぜなら、夢見ることは可能であると、若者は知っているからです。支えてくださる主によって夢が保証されているとき、それは実現すると、確信しているのです。

コスタリカ、サン・ホセの**アマール・ガセル・エルナンデス**(18 歳)の夢は、***失われた星々***という名をつけられるでしょう。

アマールは話してくれます。「6 年前に人生の夢は何？と聞かれたなら、舞踏家になるのが夢だと答えたでしょう。バレーシューズをはいてステージで踊るのが夢だと。でも、時がたち、人生の状況が変化し、その夢は後ろのほうに下がってしまいました。今、私は 17 歳で、まだその夢が自分の中にあると気づきますが、それに向ける思いは変わりました。実際、今社会は私たちにあまりに多くを求め、そのため多くの場面で、夢が挫折に終わってしまいます。高い期待を前にし、強いストレスや要求が課され、それは常識を超えたものになっています。私にとって、夢は、小さなことの中に幸せを見つけること、

[6] 参照 サレジオ会青少年司牧部門, Diamanti nascosti（隠れたダイヤモンド）, ローマ 2024, 225.

どれほど小さなものであっても、目標を達成すること、この世が求めることに抵抗することです。なぜなら、私たちは結局、完璧になって自分の光を輝かせようとした、空の『失われた星々』だからです。最後に、『あなたの夢は何か』という質問への私の答えはこれです。私の夢は、自分の目標を達成すること、周りの人々にも幸せをもたらすことができるように。ですから、人生の意味を見いだすだけでなく、望むことを行う満足感、たとえ困難であっても、自分が前進していると知る喜び、希望と喜びに支えられた自分の生きる意味は、愛する人々が誇りに思うような小さな勝利の数々から成ることを毎晩ふりかえり、見いだします。私の夢はこのように進展しました。目標を達成するための絶えざる闘いのうちに、ここまで来るために行ってきたことすべてを意識し、同時に、いつも前にあることを喜び楽しみながら。この質問に、具体的にこれ、と答えることはできません。なぜなら皆と同じように、私は限りなく広がる空の中のあの「失われた星」で、今も自分の輝きを探し求めながら、自分の願うもののために努力するのを決してやめず、人生という旅で達成できることを、心をはずませながら、待っているのです。」

コートジボワールの、**アナニ・アンリ=ジョエル・クーアディオ**(18 歳)は、自分の夢は***選択*** と名付けることができると語ってくれます。

「ぼくの夢は医者になることです。まず、なぜ医者という選択なのでしょうか？　このような仕事に就きたいと願う人は皆、いのちを救うためにそう願うと、言えると思います。それがまず思い浮かぶことです。しかし、自分自身の場合、動機はもっと大きなものです。病気の人、自ら治療を受ける手段がなく、医師不足のために亡くなっていく人を目にするとき、キリスト者として問いを投げかけられます。『神が癒し、いのちを救うための道具になってはどうか？』自分を動かすのは、父が医師であることです。父の傍らにいるとき、ぼくはより触発され、動機づけられ、関心をかきたてられます。そのためぼくは、自らを医者と呼ぶ人々の集団の一員になりたいと、願うのです。ぼくは神経科医、神経学の専門家になりたいと思っています。ぼくの大きな望みは、神のみ旨にしたがってこの夢を実現させることで、ドン・ボスコの模範は自分を動かしてくれます。」

アニータ・マルトン(24 歳)は、モリアーノ ヴェネト出身のイタリア人です。今、アニータは、実現した夢について「***ずっと夢見てきた***」と題して話してくれます。

「私は terza superiore（第 11 学年で高校の最終学年に当たる）で、ダンテを勉強していました。先生は怠惰で、気持ちのこもらない説明をしていました。伝わってくるのは退屈といら立ちだけで、私たちはダンテが嫌いになり始めていました。

教師は、目の前にいる子どもたちに「印象を残し」ます。ダヴェニアが言っているように、教室に、愛ではなく、自分の気分を持って来るなら、それ分が生徒たちの渇いた魂に残り、鈍らせるのです。私は、そうではなく、級友たちに美を発見してもらいたかった。その瞬間、それが自分の夢、応えなければならない呼びかけだと私は気づきました。その日から 8 年が過ぎ、8 年を経て、夢は実現しました。今日、私は教室で教えています。自分の前に座っている若者たちを目にしています、そして自分が人生の羅針盤の針を向けるべき夢を探している自分がいます。私たちの心にどのような願いがあるのか、誰が知るでしょう。どのような希望や不安があるのか、誰が知るでしょうか。私は若者たちの前にいます。この子たちは、私がこの子たちと一緒にいることをずっと夢見てきたのだということを知りません。」

インドからは、アガルタラ地方トリプラ州の**ビパシャ・ラングカウル**(30 歳)が、***「誰かの道を照らす光になる」***という夢を実現させ続けています。。

ビパシャはこのように言っています。「自分にできるかぎりの方法で、この世界の恵まれない人々の人生をより良い光で照らすことを、私は夢見ています。子どものころから、この世界には、歩む道が暗く、希望は閉ざされ、将来に望みなく、幸せが遠いような人々が大勢いることに気づきました。

より幸運で、より良い機会に恵まれた私は、人々の生活を、せめて少しは、より良いものにするのを助けるため、小さな貢献ができると気づきました。愛は足元から、わが家から始まります、小さな行いをすることによってはじめて私は、いつかより大きなスケールで夢を実現できるようになるでしょう。

幸せのうちに人生を生きる人々、さまざまな違いにもかかわらず、愛と平和のうちに共に暮らす人々の社会を、私は夢見ています。その社会の幸せな一員になること、意味と目的をもたらす効果的な道具となり、同時に、この世界を、暮らしていくのにより良い場所にすることを夢見ます。私を行動と克己へと呼ばれる方の道を照らす光になるのです。私は光の中を、この魅惑的な道を歩みます。その道では神ご自身が私の光で、私は道を歩みながら、その光を輝かせます、ほかの人々の歩む道が、照らされるように。」

クラリッサ・ブディアント(26 歳)、はアジア・オセアニアのインドネシア、ジャカルタに暮らしており、その夢は***本物の教育者***になることです。

クラリッサは言います。「夢は空ほど高く掲げてください！空ほど高く夢見てください。つまずき倒れることがあるなら、星々の中に倒れるでしょう―これはインドネシアの初代大統領、スカルノ・ハッタの言葉です。

私の夢は、人生が複雑で困難になった若者に同伴して共に歩むことです。私に頼らせるために傍らにいるのではなく、若者たちが私を通して神に、人類に希望を見いだすことができるように。孤独で混乱しているのがどのようなことか、私は知っています。自分のような人たちに寄り添い、共に夢を追い求める道を歩み、人生の複雑さに立ち向かうという願いは、私を目覚めているようにしてくれます。私が前進し続けられるのは、人生の旅路に聖霊がもたらしてくださる驚きです。それによって私は折々に夢を思い出すことができます。その夢を追いながら、人生の小さな、また大きなごほうびを頂くときも。

私の夢は、優しく、誠実で、技量のある教育者になること、生徒のことを深く知り、何よりも、知性と心を成長させる若者たちが自分の夢を見いだし、それを達成するのを、助けることのできる教師になることです。」

ダニエル・フローレス(28 歳)は、カラカス出身のベネズエラ人です。彼は「***夢見ることができるなら、それを実現できる***」という深い確信をもっています。

ダニエルはこのように言っています。「私はベネズエラ出身です。子どものころから医者になるのが夢でした。私はサレジオの学校で学び、宣教の体験によって人に仕えたいという熱い夢が生まれました。医科学部を修了して一年後の 2016 年、私の家族は、私たちの国の状況のため、チリに移住することを決めました。大変でしたが、私は仕事と勉強の両方に同時に取り組みました。そして 2022 年、総合内科を修了し、成績がよかったおかげで、小児科を専攻する奨学金を得ることができ、現在、その勉強を続けています。私はチリのサンチアゴで低所得者層の暮らす地域で医師として働いていますが、ベネズエラの子どもたちを助けるために帰ることを夢見ています。その夢は少しずつ実現に向かっています。私はカラカス大学の友人たちに助けられ、カラカス郊外で行われている『医療相談の日』を支援するため、チリから物資を送っているのです。また、ベネズエラに帰ったなら、地域小児医療センターを設立することを計画しています。」

４．この世に生きる宣教師、生活によってあかしする宣教師

先に指摘したように、聖年は、今日この世に生きるドン・ボスコの家族の源泉にあるものと、並行して祝うことになります。なぜなら －このことを、明確に、確実に繰り返し述べましょう － 今日、ドン・ボスコの家族であるサレジオ家族という大いなる木を造り上げる私たち、私たちのさまざまな会は、初めから聖霊によって宣教の熱意をおこされていなかったなら、ひとつとして教会の中に存在しなかったのですから。

来たる聖年は、1875 年にドン・ボスコによって進められた、アルゼンチンへの第一回宣教派遣の 150 周年にあたるのです。

したがって、この非常に大切な出来事を 2025 年の聖年に祝うことは、***受けとめ、再考し、再び立ち上がる***ために、私たちを恵まれた位置につけさせてくれます。

・**受けとめる。**私たちは、宣教の召命という賜物を神に感謝します。そのおかげで、今日、ドン・ボスコの子ら、ドン・ボスコの家族は、136 の国々で貧しく、見捨てられた子どもたちに仕えています。

・**再考する。**なぜなら、サレジオのミッションについて再考し、新たなビジョンを発展させる機会であるからです。新たな宣教論的考察に至らせる、数々の新たな挑戦や視点の光に照らして。

・**再び立ち上がる。**なぜなら私たちは、記憶すべき、そして感謝すべき輝かしい歴史があるというだけでなく、行うべき、記されるべき大いなる歴史がまだこれからもあるのです！　私たちは宣教の熱意をもって、またさらに多くの貧しく、見捨てられた若者に出会おうとする新たな情熱をもって、未来に目を向けます。若者たちが希望をもって、人生の真実な意味、神のうちに生きる人生を、生きることができるように。

受けとめる、*再考する*、*再び立ち上がる*。この 3 つの動詞は希望をよみがえらせ、養い、サレジオ会とサレジオ家族の新たな宣教の前線へ向かうよう、私たちを促します。特に、最も貧しく、疎外された若者と出会うために。

受けとめ、*再考し*、*再び立ち上がる*、これらの動詞は、薄っぺらな楽観主義によるのではありません。いつも共にいてくださるイエス・キリストへの信仰に根ざす行動です。イエス・キリストは、福音を告げ知らせるときに生じうる心配や恐れ、困難の時を、私たちが経験しているときでさえ、共にいてくださる方です。

受けとめ、*再考し*、*再び立ち上がる* ことは、新たな宣教の前線へ向けて私たちを歩み出させる希望をよみがえらせ、養います。今も、これからも、挑戦や宣教の困難は常にあるでしょう、しかし、「信仰に満ちた」希望を頂いている私たちは、受けとめ、再考し、再び立ち上がることによって、新たな社会文化的な、デジタルな、地理的な前線に向かって、勇気をもって進むよう促されます。私たち自身が周りの人々のために、希望の小さなともし火となるために。特に最も貧しく最も助けを必要とする若者のた

めです。なぜなら、今日私たちは、何よりも、*まことの「いのちの宣教者」*となるよう、呼ばれているからです。

５．真実な実りをもたらす聖年、宣教の希望

教皇フランシスコは、2025 年の聖年の大勅書で私たちに述べています。「救ってくださる神の現存を必要とする人間の心の渇望を含んだ時のしるしは、希望のしるしへと変えられることを望んでいるのです。」[7] そして、教皇は、教会を － そして教会の一員である私たちを － 招きます。2025 年の聖年、宣教の年を、具体的な希望のしるしとなることに取り組むことによって歩むようにと。次の求めるべき実りのうちに実現するしるしです [8]。

〇最初の希望のしるしは、***私たちの世界の平和***です。世界は再び戦争の悲劇のうちに落ち込んでいます。

〇希望をもって未来に目を向けることは、***生きることへの情熱に満ちたビジョンをもつこと***、周りの人々とそれを分かち合うことを意味します。私たちはキリスト者として、*希望という社会的契約*に貢献しないということはありえないのです。

〇この聖年、私たちは、**何らかの困難を経験している**多くの兄弟姉妹のため、***具体的な希望のしるし***となるよう、呼ばれています。

〇家庭、あるいは病院にいる***病気の人々に希望のしるし***を差し出すこと。

〇この*希望*はまた、希望そのものを具現する人々、すなわち若者にとっても必要です。教皇フランシスコはこう述べています。「若者を失望させるわけにはいきません。未来は彼らの情熱にかかっているのです。(中略)新たな熱意で、青少年を、学生を、恋人たちを、若い世代を心にかけることです。若者に寄り添うこと、それは教会と世界の喜びであり希望なのです」[9]

〇また、***移住者のため、高齢者のために希望のしるし***がなければなりません。その人々は、しばしば孤独を味わい、見捨てられていると感じます。

〇最後に、教皇は私たちに願います。この聖年の希望のしるしが、***数多くの貧しい人々のための希望***となるようにと。貧しい人々は、尊厳をもって生きるための最も基本的な必需品にも事欠いています。

教皇は私たちを招いています―そして私たちも同じ招きを差し出します―***希望に錨をおろして生きよう***[10]、と。なぜなら希望は、信仰、愛と共に、キリスト者の生活の本質を成すからです。しかし、なによりも、「希望は、信仰者の生き方の方向と目的を示す、いわば指南役です。〔…〕わたしたちは「希

---

[7] フランシスコ, 前掲書, 7
[8]参照 同, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15.
[9] 同, 12.
[10] 同, 18.

望に満ちあふれている」（ローマ15・13参照）べきです」[11]。それは、わたしたちが心に抱く信仰と愛を、説得力をもって魅力的にあかしするためです。そしてこの聖年に、私たちはサレジオ家族として、若者と共に、そうありたい、そうあるべきです。若者たちと共に、より信頼に足る、より魅力的な信仰のあかし － もしかすると私たちの貧しい信仰のあかし － をたてるためです。そうすれば、「一人ひとりがちょっとしたほほえみ、親しみのしぐさ、兄弟としてのまなざし、真摯な傾聴、無償の奉仕を、受ける人々にとってそれがイエスの霊において豊かな希望の種となることを感じつつ差し出すことになります。」[12]

希望の巡礼者であられたマリア、主の母、教会の母、私たちの扶けが、この旅を共に歩んでくださいますように。

総長　アンヘル・フェルナンデス・アルティメ枢機卿sdb

[11] 同.
[12] 同.